

翻 訳

ホワン・リンズ

『ミヘルスとその政治社会学への貢献』(1)

氏 家 伸 一

Joan J. Linz “Michels e il suo contributo alla Sociologia politica”
Introduzione alla nuova edizione italiana di,
Roberto Michels, *La Sociologia del Partito politico*, 1966.

[訳者はしがき]

これは、ミヘルスの主著『政党の社会学』イタリア語版(1966)にリンズが書いたかなり長文の序文の翻訳である。リンズについては、『民主体制の崩壊』や最近邦訳された『全体主義体制と権威主義体制』などで我が国でも有名だが、彼はミヘルス研究のうえでも第一人者である。ここに邦訳する序文をサルトーリは「最良のミヘルス論」と絶賛しているのである。(G. Sartori, “Democrazia, burocrazia e oligarchia nei partiti,” in “Rassagnia Italiana di Sociologia”, 1960 Anno I, N.3, p.64.) リンズはこれを基に、『社会科学国際エンサイクロペディア』(1968)に「ミヘルス」の項目を書き、これはその後のミヘルス研究に決定的な方向づけを行った。しかし、最近ではイタリアのフェッラーリス (P. Ferraris, “Roberto Michels politico (1901-1907)”, in, *Quaderni dell’ Istituto di studi economici e sociali*, [della Facolta di Giurisprudenza di Cambrino] 1/1982.) などがリンズのミヘルス像への批判的スタンスからのミヘルス研究を発表し始めている。ともあれ、この序文は、それまでのミヘルス研究を総括し、且つその後の研究に重要な影響を与えたという意味でも、無視できない文献であることは間違い無い。我が国でのミヘルス研究にも必須と考えここに翻訳するものである。

目 次

第1章 ミヘルスとその時代

- (1) ミヘルスの生涯と著作
- (2) 『政党の社会学』に合流した知的諸潮流
- (3) 『政党の社会学』とドイツ社会民主党

第2章 『政党の社会学』の批判的分析

- (1) 序
- (2) オリガーキーの諸次元
- (3) プロレタリアートの組織と他の組織でのオリガーキー
- (4) 目的の転移：代替か補完か
- (5) 官僚制化，中央集権化，オリガーキー
- (6) エリートの補充と周流
- (7) リーダーは誰に対して責任があるか：有権者か黨員か
- (8) リーダー，サブ・リーダー，活動家，黨員
- (9) 「デ・ユレ」と「デ・ファクト」のオリガーキー傾向

第3章 民主主義の諸次元

- (1) リーダーシップ，オリガーキー，民主主義
- (2) 選挙と責任性
- (3) 応答性
- (4) 有効性
- (5) 「客観的」無効と「主観的」無責任
- (6) イデオロギーの一貫性がプラグマティズムか
- (7) 民主的政治体制内部でのオリガーキー的な政党と組織

第4章 ミヘルスの著作の最近の復活

「問題はいかにして理想的民主主義を実現することができるかということではなく、むしろどの程度の民主主義が、(a)そもそも可能であるか？、(b)当面実現性があるか？、そして(c)望ましいか？、ということである。この場合、(c)は政治および世界観の領域に属するものだったが、当面我々の関心事ではない。この設問の中には科学としての政治学の基本問題を見ることができる。」(『政党の社会学』広瀬英彦訳，ダイヤモンド社，1975，445頁)

第1章 ミヘルスとその時代

(1) ミヘルスの生涯と著作

ロベルト・ミヘルスは今読者が手にしている、1911年に初めて世に出た卓抜な著作『現代民主主義における政党の社会学——集団生活の寡頭制的傾向に関する研究』のおかげで社会学の創設者たちの中でも第一級の地位を占めている。⁽¹⁾ ミヘルスはマルクスやウエーバーやデュルケムやパレートのクラスの理論家ではなかったけれども、彼の著作は、古典となった。というのも、それは社会集団における寡頭制（オリガーキー）の傾向の問題——この問題は、その後社会学のみならず、他の多くの研究分野でも最重要なテーマの一つとなった——に取り組んだからである。ミヘルスの世代は社会学の創始者の世代にすぐ続く世代であり、今世紀初頭から第二次世界大戦の間に形成されつつあった西欧世界を解明するために彼らの示唆と直観を活用しようとした。ミヘルスの問題はシュンペーター、マンハイム、ルカーチ、ガイガー、ドウ・マン、オルテガ等、彼の同時代人の著作で支配的なテーマと同じものであった。⁽²⁾ 即ち、西欧文明における民主主義、社会主義、革命、階級闘争、労働組合、知識人、エリート、大衆、民族主義そして帝国主義がそれである。それらの中からミヘルスは、労働者階級の政治活動に関するテーマを好んで選び取り、また彼の同時代人とは異なり、先行する世代の作家たちの関心と似た問題を取上げ、優生学、フェミニズム、性と道德の問題にも取り組んだ。

自分の世代の社会学者にもまして彼は、激情にとられるままに傾向を有しており、「責任倫理」よりも「心情倫理」⁽³⁾により傾斜したため、彼は時代のイデオロギー的対立と民族対立の渦中に身を置き、彼の知的活動は多分それに悩まされたのである。彼の素性は同僚たちに比べるとよりコスモポリタンであったことは注目に値する。生まれはドイツだが、家系はドイツ、フランス、ベルギーにまで遡ることが出来る。1907年にトリノー大学の私講師となり、第一次世界大戦の頃の数年はスイス

のバーゼル大学で経済学を教えて過ごし、1928年ペルーシア大学の教授になった。

その全生涯を通して彼はベルギーとフランスの知識人界と接触を保ち続けた。イギリスとパリで暫く学生生活を送ったのち、彼はマサチューセッツのウイリアムズタウンとシカゴに招かれて教壇に立った。(1927—28年の間)しかし、にも係わらず、アングロサクソンの世界との関連では、彼の興味と知識はシュムペーター、マンハイム、ガイガーなどの同時代人に比べると非常に弱い。ミヘルスは常にヨーロッパ大陸人であり、人生と政治との関連での彼の姿勢はラテン的にすらなつた。実際彼の名前はモスカ、パレートと並んで、ジェームズ・バーナムがマキアヴェッリ学派として示した思想学派に登場するのである。モスカが、新造語を(4)釈明しながら、亜民主主義 *ademocratica* と名づけた例の学派である。(5)1914年既に彼は著作『イタリアの帝国主義』を息子たちに捧げ、それには「正しくありイタリアを愛することを学ぶために」という言葉を付していたし、(6)1925年にはこのイタリアへの愛着に関して次のように書いている。

「即ち、私がこの地域、ある点でドイツとフランスの中間地帯、ライン河の国に生まれたということ、また私が心から、無条件にイタリア市民であるということ。従って、私の出身は、知的愛情によって、私がフランスとドイツの問題に関しては、両国に人間として可能な限り最大の客観性で迎えることを保証しているのだが、一方で、私がイタリア市民であるということ——これは私が自由に望み、自由に公言することだが——のおかげで、私はフランスとドイツの事柄を純粋にイタリアの視角から観ることができるのである。」(7)

彼のイタリア人としての感覚が彼をして帰化した国の外交政策を擁護させた時、彼は生まれた国で強い批判をあびることになったのだが、この感覚は、社会主義のサンディカリズム派、従って平和主義的な潮流に沿った政治スタンスから、ファシストが『同志』としての彼に言及する(8)

『ミヘルスとその政治社会学への貢献』

ようにまでなる政治姿勢へと移行したことをよく説明してくれる。

この個人的な民族の「体験」は必然的にこれらの問題に関する著作に影響を及ぼさずにはおこななかったし、彼を彼の先輩——デュルケムやウェーバーの様に自国とのみ一体化した先輩や、パレートの様に、民族、宗教、政治路線と自己を一体化することは、真の社会学者にとっては有害と考える先輩——と分かつよう作用したのである。今世紀初頭の社会党に対して若きミヘルスがなした最初の批判が、どれほど、他の国の政党との比較対照と、反軍国主義と、戦時のゼネストに対してとられた[党の]政治姿勢、彼が余りに民族主義的と判定したその姿勢とから引き出されたかを明らかにすることはとりわけ興味深い。その後彼が、すべての政党とすべての組織の中に検証することになるあの傾向は、まず最初は、ドイツ社会民主党（以下 SPD）に特有の性格——ドイツ特有の政治的、社会的状況の結果成長したもので、ウェーバーの術語とは異なる術語で分析された——と判定された⁽¹⁰⁾。『政党の社会学』では、これらの諸契機は、依然として指摘されてはいるものの組織論と心理学の次元に比べると第二次的な次元へと移されている。『民主的政党におけるオリギーの病理学のための図式の素描』ではすっかり姿を消している。現代の批評家——ギンター・ロス⁽¹¹⁾の様な——は、ミヘルスの青年時代——⁽¹²⁾社会主義者で同国の社会主義の批判者として——の著作に見出される側面、だが後のミヘルスが自身では無視することにした側面を強調する。このことは、社会学の視点に立つと、彼の著作にとっては全く都合が良かったということもできよう。構造的要因の重要性を強調することを彼に可能ならしめたからである。

ミヘルスはケルンのブルジョア貴族の家に生まれた。彼の曾祖父のマティアスは既にナポレオン戦争の時代に羊毛と織物の商いを繁盛させていた。それは続いて息子のペーターによってさらに発展させられた。彼もまた当時の市民生活と政治で重要な人物であり、1848年には、フリードリヒ・ウィルヘルムIV世に市民の意見と希望を伝える役に選ばれた

ほどである。ロベルトの曾祖母コスタンツァ・ヴァン・ハーレンは、オランダのリンブルゴのヴェールトの出身であった。彼女の従兄弟のホワン・ヴァン・ハーレンはスペインにおもむき、半島の戦争で戦い、宗教裁判所と衝突し、ロシアでの戦いに参加し、1830年のブリュッセルの反乱を指導し、最後はスペインにもどりそこでエスパルテロの時代にバルセローナの方面軍司令官と、それにペラカンの伯爵となった。コスタンツァの母親はフランス系のユグノーであったがカトリック教徒に改宗した。コスタンツァの夫ペーター・ミヘルスはカトリック系職人の運動の創始者ケプリングの支持者であった。又非常に宗教心の篤い人で、女子修道院を創設した。

この夫婦の8人の子供たちは1870年と80年の間に、銘々80万マルクから100万マルクの額を相続した。家族は少なくとも1900年の20年代までは同じく繊維業に従事した。文化闘争の間家族の親族の一人はビスマルクによって追放されたが、著者の一人の伯父は軽騎兵の将校となり、二人の女性は貴族に嫁ぎ、そして一人は国民自由党の代表としてプロイセン上院の議員となった。反プロイセン感情は1866年の戦争の間は強く感じられ、1870年にもまだ残っていたのだが、そのうちに一つの記憶と化していった。ミヘルス家の一人の男はプロテスタントと結婚したくらいである。[ミヘルス]家はいつも市の重要な家系の一つであり、若きミヘルスはベルリンのフランス系ギムナジウムへと通った後、1895年に軍隊に入る決心をし、結局「ザクセン大侯」連隊に志願した。しかし、ミヘルス自身が学位論文につけた履歴書によれば、〈*Postquam scholam belli absolvi, clypeum reliqui*〉(学校を戦争で離れて以来、盾が残った)。その後彼は、イギリスとソルボンヌにおもむき、最後はミュンヘンで、ブレンターノと相知るようになった。1897年彼はライプツィヒでブランテンブルク、ランプレヒト等のもとで学び、1年後は、ハレでコンラート、ハイム、ヴァイヒンガー、リントナー——彼の娘と結婚することになるのだが——のもとで学んだ。ハレで彼はドロイセンの指導のもとで

『ミヘルスとその政治社会学への貢献』

⁽¹⁴⁾
彼の論文を仕上げた。

ミヘルス家が伝統的に実業に従事してきたこと、彼の最初の職業選択、アカデミズムへの彼の関心、これらからはミヘルスが間もなく熱烈な社会主義者になり、社会主義者としてマールブルク大学の私講師をしなから、公開討論会にかかわったということは、想像さえできないことであった。彼の政治思想、そして自分の子供たちに洗礼を施さなかったという事実は、ドイツにおけるアカデミズム界へのキャリアを初めから閉ざすものであった。

⁽¹⁵⁾
『ドイツにおけるサンディカリズム的底流』という彼の自伝的論文は我々に、ミヘルスの内面的発展史を示してくれる。一方、『政党の社会学』イタリア語版への序文も——著者自身認めている様に——彼のすばらしい著作の出版のための、1910年までの数年間の外的歴史を提供してくれている。⁽¹⁶⁾残念なことだが、マックス・ウェーバーとの間でなされた文通のうちではいくつかの断片しか利用できないし、ソレルやモスカとの交流についての報告も存在していない。だから、これら著名な人物の彼への影響がどんなものであったか、確かめるのは難しいのである。

ともあれ、強い印象がマックス・ウェーバーのもとに残されたに違いない。ウェーバーは、いろんな機会に、若きミヘルスに対して注目すべき興味を示したのである。ウェーバーは彼をハイデルベルクにおけるいわゆる「亡命者のサロン」に導き入れ、ミヘルスに教授資格授与を拒否したドイツの大学に対しては、不愉快の念を表明したのである。ミヘルスへの個人的な手紙（1905年1月24日）と『フランクフルト・ツァイトウング』への手紙（1908年9月20日）の中で、彼は「いわゆるドイツの大学における学問の自由」に言及し、ミヘルスを受け入れなかったことは、フランスとイタリアでのみならずロシアと比較しても、不名誉であると主張した。⁽¹⁷⁾さらに彼は1903年に、ミヘルスを有名な『アルヒーフ』の共同編集者に任命した。そして、もしミヘルスが社会主義的出版物に関するジャーナリスティックな短い文章から、『アルヒーフ』——ミヘルス

はこれの定期的寄稿者となった——向けの、同じ主題のより学問的な論述へと移って行ったとしたら、それはウエーバーの信望と影響力のおかげであることは疑い無い。ミヘルス自身、彼の知的発展に対するウエーバーの影響を認め、『政党の社会学』ドイツ語第一版に献辞を書いた。

マックス・ウエーバーに捧げる

学問のためなら生体解剖すら辞さないハイデルベルクの賢者に、
魂が相似た者が心をこめて捧げる。

大学都市マールブルクにおいて、5人の立候補者による選挙が行われたが、ナウマンの支持者で国民社会党のゲルラッハ——この党で唯一当選の見込みがあった——と、保守党の候補者との間で決戦投票が必要となった。⁽¹⁸⁾国民社会党は「民主主義と皇帝」をモットーとし、ユンカーと革命の双方に反対し、労働者を社会主義運動から引き離すために相応しい社会改良の綱領のために戦っていた。一群のインテリ——その中にはミヘルスもいた——の影響により、社会民主党のこの地方の組織はミュンヘンの党大会決議に従って、党員に棄権を呼びかけるよう決定した。そして、もしそれが実行されれば保守党が多数を獲得するはずであった。党の機関紙『フォアベルツ』は、穀物関税の問題——間接的にパンの価格に係わってくる——に関する二人の候補者の立場を参考にして、異議をととなえ、他の問題は忘れ、ゲルラッハを当選させるよう主張したのである。一社会民主党員の送った電報でゲルラッハはこのことを知り、それを利用することで SPD 票の何票かを獲得し、当選することに成功した。ベーベルは一通の手紙——これはミヘルスのベーベル宛の文書と入れ違いになった——の中で、マールブルク支部の行動を支持し、彼を独裁者と非難した何人かの党員の野望を激しく批判し、この問題が1903年のドレスデン党大会で決着されるよう主張した。ドレスデンでミヘルスは、マールブルク支部の大多数の支持を得て（賛成80、反対3）、ヴォルフガング・ハイネの懲罰動議を提出した。彼が、党の敵対者を擁護するために地方組織の内部問題に介入し、「党が無様なことをするのを防

『ミヘルスとその政治社会学への貢献』

ぐように活動した」と主張して『フォアベルツ』上で自分の仕事を弁明したからである。地方組織が党大会の決定に従う以外になすべきことがないとしたら、この問題はどうかでであろうか。前日にベーベルは修正主義者に徹底的な攻撃をくわえていた。「こういう状況下での大衆の心理」は、ハイネと『フォアベルツ』に対する懲罰動議を確実に可決させるほどのものであり、ローザ・ルクセンブルク、シュタットハーゲン、レーデブーアはミヘルスを激励していた。当時を思い出してミヘルスは書いている。「疑問は無かった。この瞬間、SPDの運命(19)いやおそらくそれ以上のものがこの問題に懸かっていたのだ。」多分、懲罰動議が可決されていれば内部分裂を引き起こしていたであろう。演説を終えて、まだ演壇にいた彼は突然立ち止まり（報告は客観性を強調するために第三人称で書かれており、どれだけ自分が狼狽したのかを隠蔽しようと無駄に努力しているのだが）、以下のようなかたちで話しをむすんだのである。

「成功の見込みは無かった。しかしながら、すべての情熱を無効にする相互不信を克服するよう訴え、つまり団結と友愛に訴えることで、この過熱した雰囲気を持ち壊そうとする熱い衝動に従った。多くの人には、彼は弱虫であるように思えたであろうがもっともであった。しかし、正しい事に従事していたのである。」

彼は日記——残っていたことは喜ばしいことだ——にこう書いていた。

「二つの動機が私に慎重であることを要求した。まず、若輩者の私がかくも重要な人物の党除名を挑発したことの責任を引き受けることが出来るか確信が持てなかった。他方で、たとえ、より高い理想の名に於いてのみ行われたとしても、知性の点でかくも優れた修正主義者たちに対する急進派の——個人的な動機が無いわけではない——憎悪を利用することは正しくないと分かったのである。」

数秒後彼は、ベーベルの演説の後では、アジテーターの役を誰が演じようと、大多数の代表たちがその餌食になるつもりである事実気付い

た、と彼は想起している。彼の良心は、こういう方向で行動することを彼に禁じたし、彼はそのことを自覚していた。同様に自分の若さと、党の左派のある部分のファナティシズムにも気がついてた。しかしながら多分、確かではないが、

「特に、彼の忠誠が動揺し始めたことを念頭に置けば、かくも重大な行動に着手するには党との一体性をさほど感じなかったのだ。」⁽²⁰⁾

1905年のルールでのストライキの失敗は、彼の目に党の革命的な言説と慎重な活動との矛盾——因みにここで、同じ矛盾はウエーバーの SPD 批判の基礎にあった⁽²¹⁾ということ⁽²¹⁾を強調できる——を明らかにした。そして、優に300万票を得る強力な党のか弱い影響力はミヘルスをしてこう言わしめたのである。即ち、「一人の処女にも惚れこむことの出来ない巨人」と。この文句は、ムッソリーニが1914年のジェノバでの演説で使った。

「民主主義は無能の崇拜と一切の責任を引き受けることに対する臆病な恐れとに存するように彼には思えた。ますます強く彼は、議会主義が党の生活を不法に牛耳る、この種の墮落の特徴である妥協が、強力な理想と精力的な活動の場所を占拠していることを知った。」⁽²²⁾

こういう考えは、その後1902年のアルトゥーロ・ラブリエーラとエンリーコ・レオーネとの接触、そして1904年に始まるジョルジュ・ソレル、ユベール・ラガルド、エドゥワルド・バルト、ポール・ドレサー、ヴィクトール・グリフェールらフランスのサンディカリストたちとの友好的な付き合いによって強められた。ミヘルスは〈le Mouvement Socialiste〉の寄稿者となり、そこで党の業務遂行に関する批判を表明した。ラガルドの家で彼は、チェコスロヴァキアの政治家E.ベネシュ、イタリアの社会学者ニチェフォーロそして何人かのロシア人——その中には将来のパリへのロシア大使C.ラコウスキーもいた——と出会った。たとえ我々が、彼自身の文章から彼がまだ直接行動の原理やゼネストの神話へと転向してはいないことを知っているとしても、彼は SPD に

ついてこう書いている。

「かかる環境の下においてはサンディカリズムや直接行動やゼネストの余地は全く存在しないということは明らかである。一方で民主主義への関心、他方で、自己目的化する組織への愛、議会戦術への指向性、これらは労働者の革命的な活動には、どのようなかたちであれ、全然好都合ではない。加えて、銘記すべきなのは、平和的なブルジョアジーの折り目正しい振る舞い方を模倣した我々の大衆の高尚な性格は、大衆の中に道徳的な反逆心理を生み出すことも、荒々しい反抗心を生み出すことも出来ない。⁽²³⁾」

この短い論集は多分、当時のミヘルスの著作の基本にある政治路線をもっともうまく定式化した作品である。この文章は、幻滅した民主主義者というよりむしろ、幻滅した革命的ロマン主義者としてのミヘルス像の解釈を容易にしてくれることは明らかである。来る数年後のミヘルスの学問的著作のいくつかのテーマが既に、ここで引用されたパンフレットからも予想される。が、深い洞察はまだ見られない。というのも、著者はむしろ、大衆のブルジョア的な価値観と渴望とを調査し、彼らが道徳主義的な憤激と階級闘争とを捨て去ったことを吟味する方に傾いていたからである。

当時ミヘルスは、マルクスとプルドンとパレートの思想を繋ぎ合わせて利用し、労働運動の新しい力と新しい思想を呼び覚ますことに夢中だった。もし、ソレルがミヘルスの一冊の本への序文を書いていたとしたら（後年ミヘルスは、国際的枠組みの中での SPD に関する論文のことだと書いているが、ソレルの手紙の日付—1905年9月13日—から、そのような想定は受入れられない）、ソレルとの関係は緊密だったに違いない。もっともそのために本は公式の社会主義者から追放の憂き目を見ることになっただろう。ミヘルスはまたアルフェルト・ラウテバッハ（高地ヘッセ）の選挙区から国会議員へ立候補した。当選の見込みは全く無かったが、そのおかげで彼は世界観の仕事に専念することができた。

党大会で彼はマルクス主義の視点に立って最も伝統的な立場を支持しようとした。例えば1905年には国会議員に党大会での投票権が否定されたため一悶着があった。彼らの委任が、党員ではなく有権者に由来しているからというのである。いずれにせよ、この問題の重要度は常に福次的に留まった。⁽²⁵⁾ニパディーは、この問題の歴史について書いて、1905年にミヘルスの求めた措置は、1912年に左派の介入により再度拒否されたことを明らかにしている。このことは、急進派はいつも国会議員から投票権を奪うことに関心をもっていたわけではないことを示している。

ベーベルに対する畏敬の念という複雑な感慨にも係わらず、彼との関係の断絶は避けられなかった。結局、彼[ベーベル]は、知識人の少数派や主意主義的な少数派の力——いわんやその正当性——への信頼を一切持たない、多数派政治家の典型的な代表の一人であった。さらにその哲学的唯物論のために彼は、新しい世代とは異なる物の見方をしていた。民族性の原理への忠誠のため彼は、たとえ間接的とはいえライヒの外交政策を是認するはめになり、ミヘルス、ゾンバルトその他の多くの社会主義者には、それは社会主義の信条とは相いれないように思えたのである。(その後、ミヘルスであれゾンバルトであれ戦後の「民族的革命」を是認したことは奇妙なことだ。) ミヘルスとベーベルの間の愛憎関係は『政党の社会学』と、長い追悼文の中で表明されて⁽²⁶⁾いる。

マルブルクでミヘルスとその友人たちは議会主義に反抗していた。彼らは若者たちに訴えかけ、学生をアジリ、中央党や国民自由党の政治家たちとの公開討論会を開き、この討論会にはナトルブとジーフェキングのようなアカデミズム界の人物も参加した。議論のテーマは、民族主義、帝国主義、階級闘争、学生の政治的役割であり、討論会は一晩中続けられた。しばしば、と彼は書いている、

「これらすべてからは衝動が感じられる。……政治的に有害になるとはいえない衝動もどきが優勢を占めた。それはブルジョア社会と体制に対する若者の反動であるのみならず、結局は実際の労働運動

に対する反動でもあった。それは、……自己目的と化した組織に対するイデオロギーの戦い⁽²⁷⁾であった。」

1907年にも彼は〔第二インターの〕シュトゥットゥガルト大会に PSI [イタリア社会党] のサンディカリスト派の代表として参加、そこでソレルの弟子のバルト、ラガルデル、エルヴェ等と出会い、ミヘルスは彼らをサンディカリズムに関心があるというゾンバルトに紹介した。一定の間彼はコンラード・ヘーニシュの親友であり、カウツキーとローザ・ルクセンブルクに非常に近かった。というのも、労働組合にはソレル流のサンディカリスト派とか、知的エリート（これはむしろ修正派の中に見出せた）を作り出す可能性が全く存在しなかったからである。クルト・アイスナーの倫理的で審美的な視点が、彼をミヘルスの友人グループへと接近させたし、ミヘルス自身何年か後に、人間としてと革命家としてのアイスナーの生き生きとした肖像画⁽²⁸⁾を書いている。

ウエーバー——彼はミヘルスを『アルヒーフ』に協力するよう招いた——との友情のおかげでミヘルスはもっと学問的な著述に専念するようになったと言われている。平和主義、並びに戦争を予防する手段としてのゼネストに対する労働者党のイデオロギー的立場を論じた、長編で資料の豊富な論文、「国際組織における SPD—批判的研究」は、文献の対照という優れた仕事によって、主張と実際の政治との矛盾を白日の下に晒し、その結果ベーベルとヴィクトール・アドラーの怒りを招いた。これはシュトゥットゥガルト大会の直前であったが、その数カ月後、ミヘルスは多分他のサンディカリスト派の多くの黨員と共に離党したのである。

次の言葉は、本書へと至る知的・政治的過程を要約している。

「功名心も無く、純粋な理想主義者として、政治の学問的分析には向いていても、その実践的応用には不向きな者として、彼は、もともと自分にも気がつかない長い過程を通して政党の生体解剖にたどりついたのである。彼はそれを、苦痛にみち、何かの生き物を切り

刻むようにして、政党政治に関する彼の本の中に書いたのである。⁽²⁹⁾」

我々は長々とミヘルスの政治的伝記について書いてきたが、それというのも、それが、『政党の社会学』における社会民主党と労働組合に関する彼の批判的な見方、それに彼自身——熱狂と行動と新鮮さ、例外を認めない原理原則、そして象徴的内容に富む活動への愛——を理解するうえで本質的だと考えるからである。おそらく1932年にこの自伝を書いた時、彼は若き自己と、共感をもってファシズムの誕生とを描き、ムッソリーニに共感を抱くイタリアの愛国者とを——イデオロギー的ではないとしても、政治的なやりかたで——両立させる仕方でも描き出したのだ。しかしながら、彼の政治スタイルと彼の主意主義的な世界観への知的発展とが、彼のファシズムへの共感の基礎にある、というのが我々の見解である。

彼は「死の床で弟子たちに『偉大なることをなすには情熱を持たねばならぬ』と語った」サン・シモンを好んで引用し、こう注解した。「これが、明確な綱領と守護すべき革命的利益を有する政党に対して、カリスマ的政党が有する利点なのである。⁽³⁰⁾」

多分彼の人生には一貫性が無いなどとは言えない。もし『政党の社会学』を、社会民主党の党員であり、かつその展望に幻滅した一人の民主主義者として考えてみると、それが分かるというものである。実際彼をサンディカリストとみなすなら、彼をマルクス主義社会主義者とするより、彼の人生がよく分かるであろう。彼の伝記のおかげで我々は、デマゴギーの演説家、党大会、リーダーの人格と資質、そしてなかんづくインテリの政治的役割と階級的裏切り、これらに関する著作のうちどれだけが彼の個人的な体験に基づいているかが分かるのである。

『アルヒーフ』に最初の論文を書いた1906年と1910年の間の年月に、古典的著作の創作に非常に役立った、ある力の総合がミヘルスに作用した。先ず第一に、深い感動、多分苦痛にみちた個人的体験である。第二は、通常の学界のキャリアをさまたげることになる、革命の大義のため

『ミヘルスとその政治社会学への貢献』

の尽力と犠牲の数年である。最後に、とりわけウエーバー（これとの関連では、献辞の中で師匠の性格を要約する時とか、社会主義から社会学へのゆっくりとした、そしてほとんど無自覚の移行を描く時とかに「生体解剖」という言葉を彼が使ったということを想起できる）や、多分、トリーノのロンブローゾ家か、カフェ・ヴォア（フォリーナ）で彼が出会ったモスカら、知的功績で著名な人物との出会いである。1907年——彼の履歴では決定的——にトリーノ大学で得た非常勤の教授職は彼にジャーナリズムの仕事から一息つかせることになり、その結果彼は学術雑誌に論文など多くの文章を発表した。これに加えて我々は「外的歴史」を得ることで、ブリュッセル、グラーツ、ウィーン、トリーノで行った一連の講演が彼に、既に扱ったテーマに復帰し、異なった環境——これのおかげで彼は SPD の批判的分析をするという当面の目標を変えて、『近代民主主義における政党の社会学』を作成することになるのだが——の下で新しい資料と情報を収集するチャンスを与えた、ということが出来る。他の多くの優れた社会学的研究書と同様に、本書も、経験的データ、事実の精確な知識、経験的な一般化、いやまさしくオリガーキーの鉄則のような社会学的法則を際立たせる努力、これらの総合である。後にこの一般化と総合の努力のおかげで、彼は仕事の中心を経験的一般化と有効な仮説の定式化から、法則から導き出された余りに単純な定式の叙述へと移すことになった。

フリードリヒ・ナウマン——ウエーバーの友人で多くの矛盾を抱えた政治家——が「民主主義と支配」というタイトルで〈Die Hilfe〉に書いた『政党の社会学』ドイツ語版の書評は、この本が由来した精神状態の体験（ミヘルス自身この伝記的スケッチを肯定的に引用している）を非常にうまく記述している。ミヘルスの人生で決定的な年月にあてられたこれまでの頁の終わりにナウマンのこの文章を引用するのが至当と思える。

「ミヘルスは理想主義的の革命への参加から開始して、社会民主主義

者となり、社会主義とアナーキズムの間を大胆かつ挑戦的な仕方であらゆる歩み、ラテン諸国のサンディカリストの友となった。この知的な遍歴の間彼は大衆のアパシーとリーダーが大衆に課した拘束に気づくようになった。本書を読むと、何故嵐が来ないのかとミヘルスが自問しているそのわけが分かる。革命的ロマン主義者は、何故現実はいかにも味気なく緩慢なのかと、啞然としながら自問する。もし激しいエネルギーは一滴ずつしか放出されないとするなら、それは誰の責任か。彼はおそらくただ、もし大衆を自分の自由に出るようになるのだろうかという空想に身を任せ、思い描こうとした。しかし、もし仮にそうなったとしても、彼は同じではないだろうか。何故なら、彼のような人物は大衆を統御できないからである。そうするには彼は複雑過ぎる。実際のリーダーたちを見るだけで分かる。こうして彼は革命家から理論家になり、必要上やむを得ず、自腹を切った経験の結論を記述するのである。かくして、今だ形成途上の若い学問である社会学にとって、方法の視点から興味深く完璧な実験が行われたわけである。⁽³¹⁾

1907年と第一次世界大戦の間にミヘルスは、『[イタリアの] 社会主義運動におけるプロレタリアートとブルジョアジー。政治社会学論⁽³²⁾』を出版したが、これにより彼は、『政党の社会学』フランス語版序文の中で「政党の分析的史学」と呼んだ「応用社会学」——今なら政党社会学とよぶであろうが——に専念することを心に決めた。この著作の目次は、同じ主題の現代の著作に非常に似ている。即ち、社会主義政党の議会代表、党大会への代表の社会的構成の分析、地方選挙の立候補者の社会的構成の分析、ローマ、ピエツラ、リミーニにおける党の下部組織の分析であり、これらにはすべて、選挙への参加者の生態学的タイプの分析と、社会主義者の選挙基盤の分析がついている。夥しい量のデータとあらゆる種類の参考文献が載っているこの本は、イタリアの政党の歴史分析とイタリアにおける投票行動の研究には必須の出発点として今日でも用い

られるべきであろう。今日ならイタリアの「政治文化」なかならず労働者階級の「政治文化」と呼ぶべきもの、優勢な政治スタイルと階級闘争の様々な捉え方を、ドイツの現実と不断に突き合わせることで素描しようという彼の意図は非常に興味深く独創的でもある。本書のこの部分で、構造的特性と心理的特性を常に参照したことは、社会階級の特徴とその政治行動との間にある関係に光をあてようとする社会学者が研究すべき模範をなしている。本書の後半の部分はサンディカリストに費やされているのだが、これはフランスとの明白な対決へと導いていく。政党、なかならず労働者階級の政党におけるインテリの役割というテーマ——彼が『政党の社会学』の中で深く論じたテーマ——はイタリアの職業構成とアカデミズム界の構造の分析に繋がってくる。この問題については、彼の死の直前にも論じており、社会学理論への彼の優れた貢献のいくつかを生み出した。

『政党の社会学』が出版されたと同じ年に『性道德の限界—プロレゴメナ：思想と研究』⁽³³⁾も出版されたが、これはいち早くフランス語、イタリア語、スペイン語にも翻訳された。いくつかの翻訳に際してとられたタイトルは、それぞれが国民性を反映しているようだ。だから英語版は『性の倫理：境界の問題の研究』とあるのに、フランス人には『性愛と貞節：社会学的議論』と題して提供された。一方でその最初の著作以来彼はフェミニズム、勤労女性の役割、様々な社会道德、出産のコントロールに関心をもっており、最後のものは彼をして人口問題に取り組みさせ、数年後に『道德統計』——即ち、様々な性の問題、家族生活、社会的逸脱に関する基本的なデータ統計のこと——を書かせることになる。

1911年のトリポリ戦争は彼の人生にもう一つの危機をもたらしたが、それは『イタリアの帝国主義』⁽³⁴⁾——最初は『アルヒーフ』に発表された論文を膨らませたものである——前書きに表現されている。それは危機自体の最初の知的産物であった⁽³⁵⁾。だから、ミヘルス自身の言葉をここで引用できる。

「私は、自分の学問活動の大部分を費やしてきた、祖国、民族、民族性の現象を形成する人口と経済と人種の現象にずっと以前から専念してきたし、これからも専念するつもりだが、言ってみれば、戦争の喧騒によって思考が中断されたのである。トリノの部屋の窓からは、人々が無限に長い列をなして、喜びに胸を膨らませて行進し、一つの理想——それを私は冷静に微細に分析的な吟味にかけようとしているのだが——のために、戦場に命をかけるつもりでいるのが見えた。告白するが、トリポリ戦争の勃発は私を、幾つかの動機で、最も深い痛苦に浸させた。」⁽³⁶⁾

ミヘルスは以下のような主題を探究し続ける。即ち、戦争に関連のある苦痛、戦争のプロパガンダの人民への影響、長い間鍛えられた価値観を拒否してレトリックな呼び掛けに服従していくこと、アラブ人が自分たちの土地を守った時の動機がリソルジメントの英雄たちを戦わせたのと同じ動機であることが分からないこと、要するにイタリアで支配的な価値観の転倒である。イタリア、それは「筆者が、他の国々を悩ませている卑しい邪悪を免れた聖なる国と信じてきた国イタリア、まさにこの国民の高貴な精神から生まれた理想主義的な偉大な性質の故にこそ筆者が帰化の国として選び取ったイタリアは並みの国民の水準へと落下しつつあるのだった。」⁽³⁷⁾

これに加えるに、ドイツとの長い戦争はトレント・トリエステ問題、——「人種的な公正の原理によって」イタリアに有利なように解決されねばならぬと彼は信じていた——の解決を無限に遅らせるのではないかという恐れがある。

「私の平穩を破ったのはそのような問題の全体であった。私の人生でも、外的にも内的にも今までためされた最大の恐るべき危機の一つを経験したのである。立ち直るために一つの方法しか知らなかった。つまり、私をかくも動揺させ狼狽させた現象それ自体、即ちイタリアの帝国主義の問題の研究に愛着を持って専念すること、これ

だった。私のこの意図は、外国の文献の大部分における反感のある無効な姿勢によって、さらに、イタリアに対して抱かれた横柄で下らない——根本的に無知で、意識的に見くびった——調子によって強化された。私の新しい問題に行った吟味は、私の心配を解消するのにも、私の原理原則を変えるのにも決して役立たなかった。しかしそれは、運動に、時にその全体に、歴史的必然性の様相を付与する幾つかの因子に、すっきりと明白なかたちで気付かせてくれたという意味で必要であったしやりがいもあった。⁽³⁸⁾

論文という形で発表された彼の研究は物議をかもした。フリードリヒ・ナウマンは『プロレタリアートの帝国主義』でその書評を書き、カール・ラデックは『人民の民族帝国主義』という皮肉なタイトルで彼を攻撃し、労働者階級に対するミヘルスの背信と「混乱」を非難した。この論文の招いた批判の印象は、「私をして書かしめた精神状態と、この論文が惹起した精神状態」との間に対立があるのではないかという疑いを著者に抱かせることになった。この明白な対立を考慮したにも係わらず、彼はこう書いている。

「注意して読めば、この問題にかんする私の思想の複雑さに容易に気がつくはずなのだが、私は、不本意ながらもバランスの比重をイタリア側に傾けて終わったことを否定しない。」

結尾で彼はこう書いている。

「それ故、イタリアの帝国主義は一部は政治心理学的であり、一部は人口統計学的である。だから、イタリアの帝国主義を剽窃として、幾人かの気まぐれと意地悪から生まれた、人為的でこじつけの現象であると想像するなら、愚かなことである。従って、イタリア帝国主義に存在の権利を拒むなら、それは必要事に権利を拒むことであろう。さらに、科学の視点からするなら、イタリアの帝国主義は、それが一つ以上の共通性を有していながらやはり分析的形式と総合においてイギリスやドイツやフランスで帝国主義の名をもつ事実と

諸傾向の全体と随分異なる一つのタイプを提示してくれる限り、非常に魅力的な図柄を提供してくれる。⁽³⁹⁾」

我々がこの序文にたっぷり頁を割いたのは、私見によれば、それがミヘルスの仕事の仕方を著者自身が描いた最良のものだからである。即ち、個人的危機の発生、仕事に避難所を見出す衝迫、問題について多くのデータを発見し、それを描き、その原因——それは再び、社会の構造的ファクター（人口の圧迫、移民による社会と文化にとっての喪失という問題）や、心理的ファクター（「貧民の帝国主義」へと導くことになる心理的反応）に発見される——を明らかにする衝迫、そして最後に、その説明に「歴史的必然性の様相」を与える傾向である。この最後の特性は『政党の社会学』に、「官僚制の形而上学的パトス」⁽⁴⁰⁾について語ったグールドナーのような多くの批判を招くことになろう。この序文は、彼がファシズムが生まれる何年も前に、従って——見そう思われるように——議会制民主主義への批判的姿勢とか、カリスマ的リーダーシップへの熱狂によってだけではなく、ファシズム的なものへと好意的に引きつけられていくようになったわけを理解するのに役立つ。加えて、外国で批判され理解されない人々——とりわけ、彼がその人たちのお気に入りになった場合——に対する感激性と弁護の傾向、がある。

戦争に対してとられた姿勢の結果、この時代の人生を特徴づける不和がもう一つ生じ、それは、痛苦にみちたものとならざるを得なかった。『アルヒーフ』の1915年第2号は次のような素っ気ない通告を載せている。

「ロベルト・ミヘルス博士は第39巻第2号より『アルヒーフ』の共同編集者をやめる。彼は第40巻の共同編集者として登録されるが、それも従ってひとえに、それが第39巻の第2号よりも前に刊行されるからである。」

ウエーバーとの個人的関係がそれで壊れはしないということを我々は知っている。⁽⁴¹⁾ その時点まで二人の間には厚い友情が存在していた。それ

『ミヘルスとその政治社会学への貢献』

はとりわけ1911年のトリノー訪問の間に妻あてに書かれたウエーバーの手紙が示している。そこには、ミヘルスのつましい家の短い描写と、そこでの会話——さまざまの主題の中でも、夜の1時半までに及んだエロティシズムの関する会話——の報告が載っている。⁽⁴²⁾

1914年ミヘルスはバーゼルに移り、その大学で「経済学主任教授」となった。その地位にはペルーシアに招聘される1928年まで留まった。その出発の後にやっと「社会学」という術語が講座名として付け加わるようになったため、その間彼は間接的にのみそれを教え、試験科目として組み込むことは出来なかった。彼の経済学者としての公式の地位の故に、彼は経済理論の歴史に関する一冊の本と、特別の言及に値しないさほど重要でない（国際貿易に関するものですらそうである）いくつかの論文を書くはめになった。戦争の間のスイスにおけるイタリア系移民の状況は、彼に一冊の本を書かせることになったのだが、移住の後に書いた最初の重要な作品は『窮乏化論の教義史』と題されよう。それは、18世紀以来のフランス、イギリス、ドイツの思想における、なかならず産業革命期の労働者階級の窮乏化という考えの起源と発展に関する非常に博識の研究である。⁽⁴⁴⁾そこでは、産業化とその人間への影響についての雇
用者、労働者、学者の見解が述べられている。この研究は、その時代に経済ファクターと人口ファクターに与えられた特別の重要性、その悲観主義的宿命論と楽観主義的宿命論、そして、この問題の知的歴史においてマルクスが占める位置を分析している。全体で情報の宝庫をなしており、現代の読者には、技術と社会の変化が過去にはいつも自らへの反動を生み出してきたことを示唆している。

スイスで過ごした戦争の時期ミヘルスは、ヴルフレード・パレートのため「在職25周年記念祭」の準備に奔走し、この作業のために彼はチェリーニとかパンタレオーニという巨匠と文通することになった、ことを我々は知っている。『一般社会学要論』の中でパレートは『政党の社会学』を引用しているが、ほんのついでにであった。ミヘルスによる

『要論』の書評に挑発されてパレートは、次の様なコメントを書いた。これはパンタレオーネ宛に書かれた1917年1月付けの手紙に見られる。

「『アントロジニア』[誌]に書評が発表されたが、著者に関する部分はあまり気に入らない。私事について語られることは嬉しくありません。作品についてだけ語られるのを望みますし、それで充分です。⁽⁴⁵⁾」

しかしながら二人の接触は非常に頻繁であったに相違なく、パレートは彼のことを「親愛なる教授ミヘルス」として言及している。1921年6月の手紙の中では、ミヘルスを経済学の教授として語りながら、パレートは、この分野での教授としては個人的にはさほど評価してはいなかったが、彼を、当時はローリア、ルツァッティ、ジーノ・アリアスら巨人に相当する水準の仲間に入れている。

その間ミヘルスとソレルとの間の関係は、一層懇意になるというわけではないが、続いていた。70歳代のソレルは彼にブルードンに関する文献情報を与え、図書館長の住所を教え、イタリアのラテン的性質について（それを否定しながら）彼と議論した。二人は1922年にパリの大公殿下通りのドレスサル書店で再会し、ヴェルサイユの平和について語りあった。ミヘルスの日記から抜き出された報告からは以下のようにあらましが引用されている。

「ソレル氏は彼のいつもの非常に慎重な習癖とは反対に、私にはとても優しくかった。すぐにヴェルサイユの平和——これに私は酷い判定を下したのだが——について話し始めた。『戦争中は資本主義の民主主義と民主主義のオリゲーキーとの対立が存在した。戦争を惹起したのは前者だが、これほど明白に労働組合の利益に反するものはない。このままであるはずがない。』そしてソレルは、イタリア人、ロシア人、そして多分ドイツ人のはつらつとしたエネルギーをとて信頼していると私に語った。彼は古い友人で、戦争中熱心に手紙のやりとりをしたパレートを褒めた。ベニート・ムッソリーニ

『ミヘルスとその政治社会学への貢献』

については非常に共感をもって『彼がどこまで行くか知っているかい。いずれにせよ、彼は遠くまで行くよ』と語った。次いでロシアのことに話が進んだ。ほとんどのヨーロッパ諸国の出版物と、検閲のためフランスに入るのが困難なほとんどのロシアの出版物をさして苦労もなく入手できる可能性という点で、スイスのバーゼル大学で教壇に立つというのは私には幸運であった。私は彼に、恐るべき戦争が終わったばかりで、ヨーロッパではすべてがてんやわんやであり、私見によればボルシェヴィキの文献はあらためて容易に火に油を注ぐことになるということ、従って、それらを労働者大衆の間に広めるのはさほど好都合ではないと考える、と言った。ソレルは私の話を全く気にかけなかった。それどころか熱心に、彼は私に出来るだけ多くのレーニンとトロツキーの著作を入手してくれるよう頼んだ。それをフランス語に訳し、出版させよう、と。白状するが、この見込みは私をあまり喜ばせなかったので、私に辛い思いをさせる恐れがあった会話を辞めるチャンスを見つけると、私は知己であり師匠でもある彼に丁寧に挨拶し立ち去った。それ以後彼とは会っていない。⁽⁴⁶⁾」

1920年と1930年の間ミヘルスは、彼の優れた著作に属する一連の長い学術論文を書いた。その中には次のものがある。ウエーバーが企てた大作『社会経済学講座』のために、「反資本主義的な大衆運動の心理学」に関する一章、⁽⁴⁷⁾〈Kölner Vierteljahrshefte〉に発表された注目に値する「イタリア社会学史」、他には、既に言及した「窮乏化論」に関する一冊がある。論文集『社会哲学の諸問題』⁽⁴⁸⁾と小編『社会科学としての社会学』⁽⁴⁹⁾などの他の著作は、内容的にも質的にも、それに込めた野心のほどには及ばない。⁽⁵⁰⁾

1912年に彼は『イタリア社会主義運動の批判的歴史（1911年まで）』を仕上げたが、それはそれまでに出版された党に関する著作を基にし、リーダーの個性の素描、イデオロギーの歴史、そして幾分かの社会学的分析

を総合したものである。『政党の社会学』で定式化された思想を利用しているが、理論的な定式化ではいくらかでも進歩があったとは言えない。それは1925年に『イタリアにおける社会主義—知的潮流』というドイツ語版——ただし翻訳以上のものだが——⁽⁵¹⁾が出版された。イタリア語版に比べると、イタリア社会主義のスタイルに関する大変な誇張があり、過剰なほどに、社会学的データと他の国との対照がある。(特に重要なのは、リミーニの社会主義サークルの社会的構成と、ミヘルスが社会主義者として活動していた町マールブルクの社会民主選挙同盟との対照である。)第2巻の『イタリアにおける社会主義とファシズム』(1924年、サン・ヴィート・カドーレの日付け)は既に発表した諸論文を集めたものである。⁽⁵²⁾その第一章は彼が「社会愛国主義」と呼んだもの、即ち、カルロ・ピサカーネの社会主義的愛国主義と、ジュゼッペ・ガリバルディの愛国主義的社会主義に費やされている。続けて、「イタリア帝国主義」と工場占拠の短い説明があり、ファシズム成立の歴史的諸要因を提示して終わっている。⁽⁵³⁾それらがとりわけ興味深いのは、一人の同時代人による社会学的分析を示してくれたからである。中でも、そこにはファシズムとの関係でのパレートとモスカの位置付けについての面白い余談が見られるが、それによると、ムッソリーニは、パレートの最後の著述で彼がムッソリーニに与えた助言、即ちナポレオン三世とツァーリの犯した誤りを繰り返さないためには出版の自由を抑圧してはならないという助言に彼は従っていない。(パレートの特徴だが、そのような助言は専らプラグマティックな考察に動機付けられていた。)本書のこの部分で我々は、客観性と皮相さ、共感と反発とが混在しているのを見出すのだが、⁽⁵⁴⁾批判的な発見はほとんど無い。彼がムッソリーニを紹介するやり方は、当時の読者には分かり易かるうが、今日では全くの失敗であるように思える。唯一興味深く思えるのは、1908年のムッソリーニの文章——クロプストックの詩、〈Pagine Libere〉, vol. II, n. 21, pag. 1231, ——⁽⁵⁵⁾を指示している脚注で、そこではムッソリーニがリーダーと服従者との

間にある関係について語っており、大衆の偉大な指導者は、結局のところ反動的である、国民を代表していると自覚しているという事実そのものの結果として、彼らは予言者の振る舞いをし、熱狂的で独善的な調子を取り、自分の権力を匿名の大衆から引き出したことを忘れてしまって、人民の未来を自分で決めて、人民にそれを変える可能性を認めないことになる、と主張しているのである。ミヘルスはこの引用によって、ドゥーチェが忘れてしまったことがらを思い出させようとしたのかどうか、言うのは難しい。後の方の段落では、外国の他政党が国の征服をするためにファシズムの方法を模倣し、とりわけイタリア自身の共産主義者がそれを利用するのではないかという不安がうかがえる。この時期のミヘルスは、ファシズムが顕著な成功をおさめたこと（いくつかの不成功もあるが）を認めたのだが、未来だけが最後の審判を是認することが出来るだろうと考えていた。

ミヘルスはしばしばカリスマ的指導者としてのムッソリーニに言及したが、マックス・ウェーバーのこの術語を使ったということは、彼の側でこの概念を掘り下げたということを示唆しているわけではない。彼とムッソリーニが1924年の復活祭の頃にローマで出会ったということ、ミヘルス自身が我々に「長時間にわたる興味深い会話」の要約を残しているということを我々は知っている。ドゥーチェは当時、ポローニャ大学が彼に提供した名誉博士号を断った後で、「マキアヴェッリにおける政治的人間の概念」について学位論文でも書いてやろうかと考えていた。多分その会見がこの計画——しかし実現はされなかった——と関係している。会談は「大衆指導に対する教授タイプの人間の不適切さ」のテーマに及ぶとミヘルスは同意を表明するよりすべが無かった。大学教授はその本性上決断で臆病であり、くるみを手の中でいじくりまわすだけで、それを叩き割る決意が出来ない、それと反対に大衆の指導者は、決断を早くせねばならず、徹底的にそれを固執せねばならない、また彼は自己自身の危険を含めてあらゆる危険に立ち向かわねばならない、と

ドーチェは語った。しかしながらミヘルスは続けて、もっと危険を、というよりもカオスとまでは言わないまでも、自分の命までも危険にさらすのであり、それが彼が大衆の一員に成り下がるのを抑止するのである、と強調した。……本書の別の所では、ミヘルスはドーチェを前にした場合の群衆の感情、彼自身が免疫の無いような思える感情について叙述している。⁽⁵⁶⁾

1928年の5月彼はローマ大学の政治学部で「政治社会学講義」を行った。それは1927年に同じタイトルで出版したもので、⁽⁵⁷⁾数年後に英語にも翻訳された。大学での講義から出来た他の本と同様、本書も便利な要約ではあるが、独創性を欠いている。エリートに関する章には、貴族に関する興味深い資料があるが、彼はこれを使って、後に非常に興味深い論文をいくつか書いた。⁽⁵⁸⁾それは、ファールベックの先駆的な研究の後にながしろにされ、現代の社会学によっても取り上げられていない議論である。この章で扱われた議論のいくつかは、シュンペーターが社会階級に関する論文の中で提案した理念に非常に良く似ているし、シュンペーターの場合と同様、経済エリート、即ち企業者の人物像が浮き彫りにされている。最後の方の章でミヘルスは、ウェーバーのカリスマ的指導者を自分なりに概念化したが、ウェーバーのに比べて、特徴付けが非常に修辭的でさほど体系的ではない。

同じ年には、同時代人の重要な人物の伝記的短編からなる本が出された。ペーベル、デ・アミーチス、ロンブローゾ、シュモラー、マックス・ウェーバー、パレート、W.ミューラーの7人ですべて彼の個人的な知人でもあった。⁽⁵⁹⁾あるドイツ人批評家はこの本の書評で、重要な人物を多く知っているミヘルスに、自伝を書くよう勧めた。我々の知る限り、彼はそれを書かなかつたし、ウェーバーやパレートとの往復書簡集も出版させなかつた。彼はそれらに何度か言及しており、出版されたら今日でも、今世紀初頭の知識人の歴史について貴重な情報源となったであろう。

『ミヘルスとその政治社会学への貢献』

1927年に彼はまたマサチューセッツのウィリアムズタウン政治研究所にでかけ、さらにシカゴ大学の夏期講座で教えた。後者では彼の名前は、メリアム、ゴスネル、ラスウェルと共に政党の比較研究コース用に提供されたリストに見出される。そこでなされた講義は、論文「政党の社会的性格に関するいくつかの考察」⁽⁶¹⁾と、民主主義の問題に対する新たな関心——これは「民主主義問題の基本原理」論文に表明された⁽⁶²⁾——を触発したに違いない。シカゴにおもむいた時彼は公式にはまだバーゼル大学の教授だったが、1928年には、一般経済学と協同体経済学の正教授としてペルーシア大学に赴任することになった。

続く8年間彼はもう8冊の本を出し、たくさんの論説を主に新聞に書いた。愛国主義とナショナリズムの仕事にちゃんとけじめをつけ、さらに『民主主義と権威の研究』⁽⁶³⁾で「オリガーキーの鉄則」にたちかえった。既にローマとシカゴでの講義のテーマだった社会的移動の問題が、『戦後の支配階級における階層変化』(そのイタリア語版『政治階級の新研究』)⁽⁶⁵⁾で一層掘り下げられた。本書は、この主題で1927年に書かれたソローキンの古典的著作に比ぶべくもないが、知識人階級やファシスト・エリートなどのエリートの特異なグループについての補完的な情報を提供することで、ある意味でそれを仕上げている。さらにこの本はこの主題に関するドイツ語、フランス語、イタリア語の文献についての優れた情報源でもある。

方法論に関する彼のコメントは非常に興味深く、もっと掘り下げた研究を触発するのだが、書評を書いたジグモンド・ノイマンが引用するように、⁽⁶⁶⁾「本書の根本的欠陥は、集められた豊かな資料の厳密に科学的な分析と最終的な総合を欠いている点にあるようだ、即ち、マックス・ウェーバーのたくさんの弟子たちと共通の欠陥である。もっともウェーバーは豊富な知識に、全く異例の総合的能力を結び付けていたのだが。」実際同様の批判がミヘルスの晩年のほとんどの著作に妥当する。例外をなすのは、『社会科学エンサイクロペディア』に書いた項目「権威」、

「保守主義」, 「知識人」ないし, レオニーダ・ビソラーティとナポレオーネ・コラヤンニの伝記的項目,⁽⁶⁷⁾そしてフィーアカントの編集する『社会学案内』に書いた「愛国主義」の項目である。⁽⁶⁸⁾それらでは, 他の著作に見られる物語的で非有機的な性格にかわって, 有機的な処理が前面に出ており, そのため今日でも有益な概括となっている。知識人の問題は非常に重要な二つの論文で再論されている。植民地問題は依然として彼の関心対象であり, 1935年と1936年には、『クリティカ・ファシスタ』に制裁措置に関して二つの論文を書いているほどである。同時期に彼は小規模でさほど重要でもない論文で, 労働組合と協同組合と経済の問題を扱っていた。この時期のミヘルスの著作を見ると, しばしば自分の関心と能力からは外れた問題を扱って, 過剰な方面で精力を浪費しているような印象を受ける。多分, 友人とか自分の勤める機関とか, それにおそらく経済的動機によるプレッシャーのせいであろう。『政治階級の新研究』は二つの大戦の間の社会的成層, エリート, それと政治との関係の研究に対して根本的な貢献となったはずだが, 実際にはこの目標は達成されなかった。

失敗の原因は, ミヘルスが——ウエーバーとデュルケムが行ったのとは反対に——独自の資料を収集し, 第一次資料にあたることを怠ったことに求められるべきである。実際彼は, 1930年ドイツ社会の構造研究のために資料を集めたガイガーに匹敵する調査の労をつくさなかったし, 『自殺論』のためにデュルケムがなした様に独自の資料で仕事をするとするようなこともせず, 最後に『社会政策学会』の「聞き取り」とか工場に関する骨の折れる調査でウエーバーが行ったようなことを真似ることもなかった。⁽⁶⁹⁾ミヘルスは主に, 第二次資料か新聞雑誌の記事に依拠した。しかもたいていの場合彼は, 例えば, 当代としては非常に進んだ統計的手法を駆使したデュルケムや, 数量的調査の利点に気付き, 行動の調査のためある種の方法を先取りするところまで到達していたウエーバーのような独自の方法論を打ち立てようとはしなかった。要するに, 独自

28 (1350)

の資料を収集しなかったこと、そしてほとんど関係の無い資料から寄せ集められ、意図的に関係付けられた断片的情報に常に依拠していたということ、これにより彼の著作は類を見ない情報源となっているのである。同時に、鮮やかに定式化された唯一の主題に基づき、用心深い展開がなされた大著や優れた論文の特徴である根本的な統一性というものを欠落させているのである。ミヘルスの晩年の著作の『政党の社会学』に対する関係は、マンハイムの晩年の著作の『イデオロギーとユートピア』に対する関係と同じである、と断言できる。にもかかわらず、マンハイムであれミヘルスであれ、良書は収集されるべきであろう。かくして、ミヘルスは『政党の社会学』とさほど重要ではない論文と梗概の著者としてのみならず、優れた論文をもいくつか書いた著者としても想起されることであろう。彼の長く勤勉な人生は1936年5月2日に終焉を迎えた。享年60であった。彼より年長で、第二次世界大戦まで経験したモスカ、その文通と他の情報源によってそれに相応しい描かれ方に値する人生を送ったモスカよりも5年前にあたる。幻滅した感傷的な政治的人間、帰化した国の愛国主義者そして科学者という彼の人物像は、他の少数の人と共に、今世紀初頭の20年代と30年代を特徴づけた矛盾、そして忠誠の相剋とを反映しているのである。

注

- (1) Robert Michels, *Zur Soziologie des Parteiwesens in der modernen Demokratie: Untersuchungen über die oligarchischen Tendenzen des Gruppenlebens*, Leipzig, Dr. Werner Klinkhardt, Philosophischsoziologische Bucherei, Band XXI, 1911. この著作はイタリア語では1912年に初めて、著者の新しい序文をつけて発表された。*La sociologia del partito politico nella democrazia moderna. Studi sulle tendenze oligarchiche degli arregati politici*, Torino, UTET. 1924年は再び UTET 社から再販された。今回のイタリア語での新版は1925年に出版されたドイツ語の第二版をもとにしている。このドイツ語第二版には、第一版と比べてみると、新しい序文と、1911年以来ドイツとイタリアで起きた政治状況の発展を考慮し

たいくつかの追加が含まれている。本稿で『政党の社会学』に閑説する時は、本書の頁数で示すことにする。

- (2) この世代の著作者たちの作品はイタリアの読者には多分アンリ・ドゥ・マンとテオドル・ガイガーを例外として、よく知られている。ドゥ・マンはミヘルスと共に社会民主党に対する最も優れた批判を自己の胸にたたき寄せた一人であり、ガイガーは多くの面でミヘルスのとよく似た知的発展を遂げた人物である。
- (3) マックス・ウェーバーの行った有名な区別である。cfr. Pietro Rossi, *Lo storicismo tesdeso contemporaneo*, Torino, Einaudi, 1956. ウェーバーの『職業としての政治』のイタリア語訳としては, *Il lavoro intellettuale come professione*, a cura di D.Cantimori, Torino, Einaudi, 1948 を見よ。ウェーバーはミヘルス宛の手紙(1908年2月9日)で、あらゆるストライキは社会主義の利益のために行われるのであり、そのためだけでも「正当」と考えられるべきとするミヘルスの主張に異議を唱えた。「成功」に基づいて「倫理を測定する」ことを咎めつつウェーバーはこう書いている。「君はコーヘンをすっかり忘れてしまったのか。それを、少なくとも彼なら君からたたき出せただろうに。サンディカリストの君からすっかりね。……。サンディカリストとしてなら、多分次のように言えたい、(言うべきだったろう)。即ち、ストライキを批准する心情は常に正しい心情だ、それが(階級の)軍国主義的心情であるとか、(祖国と考えられた社会階級との関連で)愛国主義的心情 etc である限りで。しかし成功に言及するとは何という、無力!!しかもその上、事実を歪曲するとは。」Wolfgang J. Mommsen, *Max Weber und die deutsche Politik 1890-1920*, Tübingen, J.C.B. Mohr, 1950, [S.115] に引用。
- (4) James Burnham, *The Machiavellians*, New York, The John Day Co., 1943. イタリア語では *I Difensori della liberta*, Mondadori, 1947 として訳された。
- (5) 最初は <Il Pensiero Moderno>, I(1912), pp.310-316 に発表された Gaetano Mosca, *La sociologia del partito nella democrazia moderno*. これは *Partiti e sindacati nella crisi del regime parlamentare*, Bari, Laterza, 1949, pp.26-36 に再録されている。
- (6) R.Michels, *L'imperialismo italiano*, *Studi politici demografici*, Milano, Società Editorico Libreria, Studi economici-sociali contemporanei, N.8, 1914, p.III.
- (7) R.Michels, *Francia contemporanea. Studi, ricerche, problemi, aspetti*, Milano, Corbaccio, 1927, p.7.
- (8) Vedi: Paolo Orano, *Roberto Michels, l'amico, il maestro, il came-*

- rara, in <Annali della Facolta di Giurisprudenza>, R.Universita degli Studi di Perugia, vol.XLIX, 1937, Serie V, vol.XV, pp.9-14.
- (9) 次に引用された文章を参照。G.Eisermann, *Vilfredo Paretos System der allgemeinen Soziologie*, Stuttgart, Enke, 1962.
- (10) R.Michels, *Le congrès socialiste de Dresden et sa psychologie*, in <L' Humanité Nouvelle>, Revue Internationale, 1903, n.53, 740-754.
- (11) *La sociologia del partito politico*, p.524.
- (12) Günther Roth, *The Social Democrats in Imperial Germany: A Study in Working-Class Isolation and National Integration*, Totowa, N.J., Bedminister Press, 1963, passim.
- (13) R.Michels, *Peter Michels und seine Tätigkeit in der rheinischen Industrie, in der rheinischen Politik, und im rheinischen Gesellschaftsleben*, in *12 Jahebuch des Kölnischen Geschichtsvereins*, Köln, 1930 e R. Michels, *Don Juan van Halen (1788-1864). Contribution à l'histoire belge et espagnole*, in <Bulletin de l'Association des Amis de l'Université de Liège>, janvier-avril 1930.
- (14) *Zur Vorgeschichte von Ludwigs XIV. Einfall in Holland*. Inaugural-Dissertation zur Erlangung der philosophischen Doktorwürde, welche mit Genehmigung der hohen philosophischen Fakultät der Vereinigten Friedrichs-Universität Halle-Wittenberg Mittwoch, den 7. November 1900 Mittags 12 Uhr zugleich mit den angehangten Thesen öffentlich verteidigen wird Robert Michels aus Köln am Rhein, Halle, a.S., Buchdruckerei des Waisenhauses, 1900.
- (15) R.Michels, *Eine syndikalistisch gerichtete Unterströmung im deutschen Sozialismus*, in <Festschrift für Carl Grünberg zum 70. Geburtstag>, Leipzig, Hirschfeld, 1932. pp.343-364. (拙訳, ロベルト・ミヘルス「ドイツ社会主義におけるサンディカリズム的底流(1903-1907)」『神戸学院法学』第23巻第4号, 1993年, 79-106頁) ミヘルスの歴史にとっては非常に重要な資料の一つであり, 我々もこれに大きく依存している。
- (16) 本書にも付録として再録されている。
- (17) Vedi J.Mommsen, *op. cit.*, p.127.
- (18) ナウマンについては弟子であり友でもあり, その後連邦ドイツ国の大統領にもなったホイスの書いた伝記を見よ。Theodor Heuss, *Friedrich Nauman*, Stuttgart, Deutsche Verlagsanstalt, 1957.
- (19) R.Michels, *Eine syndikalistische ... cit.*, pp.348-349. [ミヘルス『底流』論文, 88頁]

- (20) *ibidem*, p.350. [同上, 90頁]
- (21) J.Mommsen, *op. cit.*, passim; G.Roth, *op. cit.*, pp.296-304; *Max Weber, Werk und Person*, a cura di Eduard Baumgarten, Tübingen, J.C.B. Mohr, 1964. 第三のものの529—533頁と607—610頁にはウェーバーの文章と, ウィーンでもたれた公務員の養成コースでの演説が引用されている。また, 次の中の「社会主義」の項目も見よ。*Gesammelt Aufsätze zur Soziologie und Sozialpolitik*, Tübingen, J.C.B. Mohr, 1924, pp.492-518.
- (22) R.Michels, *Eine syndikalistische ...cit.*, pp.348-349. [ミヘルス『底流』論文, 90頁]
- (23) R.Michels, *Le syndicalisme et le socialisme en Allemagne*, in *Syndicalisme et Socialisme*, a cura di Hubert Lagardelle, Bibliothèque du Mouvement Socialiste, Paris, Marcel Rivière, 1908, pp.21-28, *ivi* p.26.
- (24) R.Michels, *Lettere di Gerges Sorel a Roberto Michels*, in <Nuovi studi di diritto, economia e politica> II(1929), pp.288-294.
- (25) Thomas Nipperdey, *Die Organisation der deutschen Parteien vor 1918, Kommission für Geschichte des Parlamentarismus und Politischen Parteien in Bonn*, Düsseldorf, Droste Verlag, 1961, vedi *ivi* cap.VII: *Die Sozialdemokraten*, pp.293-302 ed in particolare pp.353-354.
- (26) R.Michels, *August Bebel* in <Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik>, vol.37, 1913, pp.671-700.
- (27) R.Michels, *Eine syndikalistisch ...*, pp.356-357. [ミヘルス『底流』論文, 951—96頁]
- (28) R.Michels, *Kurt Eisner*, in <Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung>, XIV(1929), pp.362-363.
- (29) R.Michels, *Eine syndikalistisch ...*, pp.362-363. [ミヘルス『底流』論文, 100頁]
- (30) R.Michels, *Corso di sociologia politica*, lezioni tenute nel maggio 1926 per incarico della Facoltà di Scienze Politiche della R.Università di Roma, Milano, Istituto Editoriale Scientifico, 1927, p.104.
- (31) Friedrich Naumann, *Demokratie und Herrschaft*, in <Die Hilfe>, 15 gennaio 1911.
- (32) R.Michels, *Il proletariato e la borghesia nei movimenti socialisti italiani. Saggio di scienze sociografico-politica*, Torino, Fratelli Bocca, 1908.
- (33) R.Michels, *Die Grenzen der Geschlechtmoral. Prolegomena: Gedan-*

- ken und Untersuchungen*, München, Frauenverlag, 1911; イタリア語版は著者が見直し筆を加えた。 *I limiti della morale sessuale, Prolegomena: indagine e pensieri*, Torino, Fratelli Bocca, 1912.
- (34) R. Michels, *L'imperialismo italiano. Studi politico-demografico*, Milano, Società Editorice Libreria, Studi economico-sociali contemporanei, N. 8, 1914.
- (35) R. Michels, *Elemente zur Entstehungsgeschichte des Imperialismus in Italien*, in <Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik>, XXXIV (1912), nn, 12.
- (36) R. Michels, *L'imperialismo...*, cit., p.V.
- (37) *Ibidem*, p.VI.
- (38) *Ibidem*, p.VIII.
- (39) *Ibidem*, p.180.
- (40) Alvin W. Gouldner, *Metaphysical Pathos and the Theory of Bureaucracy*, in <American Political Science Review>, XLIX(1955), pp.490-507. これは次にも再録されている。 *Sociology: The Progress of a Debate*, a cura di S. Lipset e N. J. Smelser, Englewood Cliffs, N. J. Prentice-Hall, 1961, pp.80-89. とりわけ次の章を見よ。 *The Tradition of Michels*, pp.86-89.
- (41) ウェーバーとミヘルスとの関係の決裂については次を見よ。 Roberto Michels, *Max Weber*, in <Nuova antologia>, anno 55, fasc. 1170, 16 dicembre 1920, pp.355-361. [拙訳, 「ロベルト・ミヘルスの同時代人論 (5), マックス・ウェーバー」『神戸学院法学』第15巻第4号1985年5月] この追悼文は二人の関係の親密さをうかがわせてくれる。「長い間の親密な友情関係の、辛く取り返しがつかない破綻を確定した著者あての手紙の中でウェーバーはイタリアの参戦を、イギリスに対する純正の敬意ある行為(彼はもっと激しい言葉を使っていたが)と見なしていた。私は深刻な外交に係わることには疎い。」次も見よ。 Marianne Weber, *Max Weber. Ein Lebensbild*, Tübingen, J.C.B. Mohr, 1926, pp.363,489.
- (42) R. Michels, *Einige Materialien zur Geschichte und Soziologie des italienischen Hochschulwesens*, in <Archiv>, LX(1928), pp.542-576, ivi p.473, nota 73. 彼はまた、フランス系スイスとドイツ系スイスでの社会学の受けとめ方の違いについて記している。
- (43) R. Michels, *Le colonie italiane in Svizzera durante la guerra*, Roma, Istituto Storiografico della Mobilitazione, Serie statistico-economica, Alfieri e Lcroix, 1921.
- (44) R. Michels, *La teoria di C.Marx sulla miseria crescente e le sue ori-*

- gini. Contributo alla storia della dottrine economiche*, Torino, Fratelli Bocca, Piccola Biblioteca di Scienze Moderne, 1922.
- (45) Vilfredo Pareto, *Lettere a Maffeo Pantaleoni, 1890-1923*, a cura di Gabriele de Rosa, Roma, Edizioni di Storia e Letteratura, 1902, vol.III (1907-1923), p.206. ミヘルスについては次にも。pp.207, 286, 287.
- (46) R.Michels, *Lettere di George Sorel a Roberto Michels*, cit., p.293.
- (47) R.Michels, *Psychologie der antikapitalistischen Massenbewegung*, in *Gründriss der Sozialökonomik*, Abt.IX, Teil 1, pp.241-359.
- (48) R.Michels, *Elemente zur Soziologie in Italien*, in <Kölner Vierteljahrshefte für Soziologie>, III, (1924) e R. Michels, *Nachtrag zur Elemente zur Sociologie in Italien*, in <Kölner Vierteljahrshefte für Soziologie> IV (1924), pp.331 ss.
- (49) R.Michels, *Probleme der Sozial-philosophie*, Leipzig, Teubner 1914.
- (50) R.Michels, *Soziologie als Gesellschaftswissenschaft*, Berlin, Mauritius-Verlag, Lebendige Wissenschaft, Strömungen und Probleme der Gegenwart, IV, 1926.
- (51) R.Michels, *Sozialismus in Italien, Intellektuelle Strömungen*, München, Meyer und Jessen, 1925.
- (52) R. Michels, *Sozialismus und Faschismus in Italien*, München, Meyer und Jessen, 1925.
- (53) *Ibidem*, pp.253-323.
- (54) *Ibidem*, pp.319-321.
- (55) *Ibidem*, pp.320.
- (56) ムッソリーニに関しては, cfr. R.Michels, *Sozialismus und Faschismus in Italien*, cit., pp.319-323; ミヘルスの術語「カリスマ」の使用法に関しては, cfr. R. Michels, *Corso ecc. cit.*, cap.IV, pp.61-104; R. Michels, *Grundsätzliches zur Problem der Demokratie*, in <Zeitschrift für Politik>, XVIII(1927), pp.289-295, ivi. passim; R. Michels, *Some Reflections on the Sociological Character of Political Parties*, in <The American Political Science Review>, XXI(1928), pp.753-772, ivi, passim. ムッソリーニとの出会いに関しては, R. Michels, *Italien von heute. Politische und wirtschaftliche Kulturgeschichte von 1860 bis 1930*, Zurich, Orell Fuessli, 1930. ムッソリーニの学士号取得の意図については, R. Michels, *Einige Materien...*, cit., p.566.
- (57) R.Michels, *Corso di sociologia politica*, cit.
- (58) R.Michels, *Studi metodologico-storici sull'assetto della nobilita in*

- Italia*, in <Rivista Internazionale di filosofia del diritto>, XIV(1934), pp.59-103.
- (59) R.Michels, *Bedeutende Männer. Charakterologische Studien*, Leipzig, Quelle und Meyer, 1927.
- (60) W.スルツバツハの書評。<Archiv für Geschichte der Arbeiterbewegung und des Sozialismus>, XII(1928), p.349.
- (61) 注(56)を見よ。
- (62) 注(56)を見よ。
- (63) R.Michels, *Der Patriotismus: Prolegomena zu seiner soziologischen Analyse*, München, Duncker und Humblot, 1929.
- (64) R.Michels, *Studi sulla democrazia e sull'autrità*, Firenze, La Nuova Italia, Facoltà Fascista di Scienze Politiche, R.Università di Perugia, Collana di Studi Fascisti, pp.24-25, 1933.
- (65) R.Michels, *Umschiftung in den herrschenden Klassen nach dem Krieg*, Stuttgart, Kohlhammer, 1934; nella traduzione italiana: *Nuovi studi classe politica. Saggio sugli spostamenti sociali ed intellettuali del dopoguerra*, Roma, Soc. Ed. Dante Alighieri, 1936.
- (66) <American Sociological Review>, I(1936), pp.820-821. に発表。
- (67) 次の項目。 *Authority*, in *Encyclopedia of the Social sciences*, New York, MacMillan, 1931, vol. II; *Bissolati Leonida*, idem, vol. III; *Colajanni Napoleone*, idem, vol.III; *Conservatism*, idem, vol.IV; *Intellectuals*, idem, vol.VIII.
- (68) *Patriotismus*, in *Handwörterbuch der Soziologie*, Stuttgart, Enke, 1931, pp.436-441.
- (69) このマックス・ウェーバーの活動については次を見よ。 Paul F. Lazarsfeld e Anthony R.Oberschall, *Max Weber and Empirical Social Research*, in <American Sociological Review> (1965), pp.185-189.